

課程博士論文

Representations of Aggression and Their Dynamics
in D. H. Lawrence's Fiction

(要旨)

広島大学大学院 文学研究科

博士課程後期 人文学専攻

学生番号: D162729

大山 美代

Representations of Aggression and Their Dynamics in D. H. Lawrence's Fiction

D・H・ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) を、人間愛に満ちた作家と捉える見方は一般的には稀有なものであり、ヒューマニズムへの批判や反キリスト教、性的自由の喧伝などの、独特な思想による過激な表情しか知らない読者があまりに多い。しかし、ロレンスの思想の根底にあるのは、歴史や文化によって構築された社会的自我に縛られた人間の現状を憂い、知性偏重の文明的な価値観を壊して、階級格差によって確執を生む人間関係の解体と再構築に取り組もうとする、熱意に満ちた姿勢である。したがってロレンスは、知性によって抑圧されてきた「肉体的意識」を目覚めさせることによって、近代社会に縛られた自己を「再生」し、新たな人間関係の創造をめざした、人間の未来への洞察に満ちた作家であると言える。以上のことを明らかにするのが、本論文の主たる目的である。ロレンスが「肉体的意識」をしばしば「動的意識(‘dynamic consciousness’)」と呼んでいることは見落とされがちであり、本論文ではその「動的」という概念こそ、ロレンスの思想の真髄であることを新たに提案した。そして、人間本来の「動的」あるいは「攻撃的」なエネルギーが発揮される時、固着した自他認識に「動き」が与えられ、知的意識によるものの見方が覆されることへの期待が、彼の著作を通じて貫かれていることを主張した。フロイトやニーチェといった同時代の思想家たちが、攻撃的エネルギーは人間の根源的本能であると述べているように、ロレンス作品においてもまた、抑圧された攻撃性が解放されることによって、社会的自我から躍動的に離脱する瞬間がみられる。それに加えて本論文では、「動的意識」の力によって、社会的差異により隔てられた他者との関係が動的に架橋され、停滞した古い人間関係が刷新されるという、ロレンスの作品を駆動するダイナミズムについて、精緻な作品分析を通して論じた。

本論文は、序章と、4つの章からなる本論、そして結論によって構成される。ロレンスの短編小説を中心に、作家自身の思考の道筋を、20世紀の思想家や精神分析学者の理論を参照しながら論じた。

‘Unrepresentable Experiences in the Early Works’ と題した第1章では、ロレンスの初期作品において、日常の意識から逸脱した瞬間的な身体感覚の目覚めが喚起する、肉体を通じた精神の「再生」について考察した。また、登場人物が、人間の知性的な表象行為か

ら離れて、身体感覚に直接訴える情動やエピファニーといった現象を体験することによって、社会的差異にもとづく差別的意識をはらんだ人間関係が、結果として動的に架橋されていくことを論じた。ロレンスの「原始的なもの」への憧憬は、中期から後期の作品において「接触」という行為を通じて表現される、と従来の批評家たちには考えられている。しかし、「非人間的（‘inhuman’）」や「非個人的（‘impersonal’）」といった言葉、さらには視覚の優位性の否定や、動物性といったプリミティブネスが‘The White Stocking’ (1907)にすでに表れていることから、脱人間主義的な次元における、意識の交流のダイナミズムが、ロレンスの最初期の短編からはっきりと描かれていることを初めて指摘した。第2節では、ロレンス作品における情動が、他者への伝染というはたらきによって、異なる階級に属する相手との間の、知的意識や感情では乗り越え難い差異を克服し、架橋する力を持つことを論じた。また、作品中に表れる情動とエピファニーが先行研究において混同され、違いが明確に示されていないことを問題視し、情動とは、間主観性によって個と個の間の隔たりを溶かす非個人的経験であり、一方でエピファニーは、個と真理が直接つながることで啓示的感觉と生の肯定感をもたらす個人的経験である、というように、それぞれの定義と相違点を明記した。ロレンスが情動とエピファニーの違いを認識したうえで、互いを組み合わせているという指摘は、本論文の独自性である。さらに第4節では、作品中に自己の「死」と「再生」という状態が作り出され、その狭間で、既知の自他認識の解体と、「脱自」による他者との恍惚的交流が行われることで、未知の関係が創造されることを、バタイユの「内的経験」論に照らしながら論じた。

‘The Ambiguity of “Stillness” and Finding a Remedy in “Aggression”’と題した第2章では、本論文の主軸である攻撃性や動的エネルギーの激しさと対をなす、「静（‘stillness’）」や「不活性（‘inertia’）」という概念に着目した。第一次大戦の時期に書かれたロレンスの中期作品においては、登場人物が「静」の境地への到達を理想とする語りが顕著である。しかし、他者と交流する欲望を持たず、不活発な状態であることが、肉体と精神の「再生なき死」を引き起こし、個を消滅させてしまう退行性へとつながることに、作品における主人公の死が警鐘を鳴らしていることを指摘した。そして、ロレンスの島を舞台とした小説群や‘The Prussian Officer’ (1914)を検証しながら、これらの作品が、欲望や攻撃的本能を外に向けることの重要性を逆説的に示しているのではないかと新たな解釈で読み解いた。前章で分析した「肉体的意識」による交流は、ラカンの‘The Theory of Three Orders’

になぞらえると、「象徴界（‘The Symbolic’）」における表象行為という人間の知的発達によるコミュニケーションから逃れて、肉体による直接経験の場である「現実界（‘The Real’）」へと回帰することを奨励していると言える。しかし、その状態が過度の‘stillness’や‘inertia’と結びつくとき、母体と胎児の一体状態のような充足感へと戻ってしまい、個人の自立性が奪われ、主体的に他者と関わる欲望をなくさせる偽の快樂へと人を陥らせるということが、作品の中で示されていると指摘した。ロレンス作品において「肉体的意識」は動的な空間の中で発揮されねばならず、さらに、個が自立して他者存在に積極的に挑み続ける必要性が逆説的に提示されている、という新たな解釈を展開した。

‘Facing the “External” Others in the Late Works’ と題した第3章では、後期作品において、近代西洋文明の外部の価値観を未だ有する「外的他者」たちとの接触を通してイギリス人主人公が経験する、積極的な生命力のやりとりについて論じた。‘The Woman Who Rode Away’ (1925)のように、民族的他者たちの恐怖性が強調され、彼らが西洋人女性のアイデンティティや意志の力を剥奪して、自己滅却的で受動的に変化させていく寓話が存在することから、先行研究においてはこのような異人種間の関係を、ロレンスの民族差別、あるいは女性蔑視の表れとみる非難が根強い。しかし本論文では、*St. Mawr* (1925)の中で、強者に対する弱者の「ルサンチマン的な攻撃性」と「自然の本能的な攻撃性」の是非が問われていることを足がかりに、それぞれの攻撃性についてのロレンスの考えをニーチェの思想と比較しつつ分析することで、ロレンスがポストコロニアリズムと社会的ダーウィニズムの文脈を超えて、多元的生命の共生への道を模索していたことを論じた。そして、西洋人、植民地の人々、動物という異なる種の有機的な共存を可能にさせるものは、他者同士が「個」としての生命力を示し合うことで、相互的にエネルギーを交換するような関係性である、と結論づけた。それは、互いの差異を打ち消しあうのではなく、逆に際立たせることによって相手を圧倒し、生命主義のレベルで関係を再構築していくという、攻撃性による積極的な共生が説かれていることを立証するものである。

‘Discovering the “Internal” Other and a New Vista on Human Relationships’ と題した第4章では、地理的な外部世界からイギリスへと視点を戻し、これまで外的他者の中に潜むとされ、恐怖を喚起してきた「暗黒の部分（‘dark place’）」が、実際には人間の肉体の内部に初めから存在していたもの、すなわち「内的他者」であったことを、ロレンスの思想から明らかにした。「暗黒」とは、文明化の過程で虐げられてきた野生や動物性であり、

攻撃性の発揮によって、恐怖や羞恥といった近代人の自意識を打ち破ることが、「内的他者」の解放へとつながることを論じた。このことから、ロレンスは一般的に批評家たちが考えているような原始主義者ではなく、人間の自意識の内部の肉体的な感覚、そして人間が作り出した近代西洋文明の内部が、「動的」に攪乱されることによって再生しうる可能性を信じる彼の態度が、作品を包括的に分析することで明らかになると論じた。さらに、「動的意識」による交流の持続し難さという問題がこれまで未解決であったのに対して、ロレンスが*Lady Chatterley's Lover* (1928)の中で「肉体の慈悲 ('bowels of compassion')」という観念を提示することによって、男女の関係が瞬間的結合にとどまらず、永続していくための道を最後に導き出したことを論じた。

ロレンスは、人間の生命力の源である攻撃性の積極的価値を引き出すことに力を注ぎ、その動的エネルギーこそが、「他者」性を過剰に意識する近代社会における知性や精神の拘束を打ち破り、人間の未来を作り出していく力を持つことを説いたのだ、と本論文の終わりに結論づけた。ロレンスのテキストにみなぎる攻撃性のダイナミズムとは、近代の悪習への反動、そして、構築された既存の認識的枠組みに対する反作用的な力として働くものでありながらも、停滞した近代人の意識の内部に「動き」を与え、平和と共生へのラディカルなアプローチを図るものである。ゆえに、ロレンスの文学作品は、100年後の現代の読者の意識をも鮮やかに改革する力に満ちている、として本論文をしめくくった。